

## 入選

### 本当の「ごめんなさい」

福井県 武生南小学校 六年

川本 大

「この本、読んでみなさい。」

タブレットばかりしている 3 人兄弟のぼくたちに、祖母が一冊の本を持ってきた。結局、弟たちは読まないで、長男のぼくがしかたなく読んだ。

『コウくんときいろいはね』と言う本で、「日本更生保護協会」というところが作った本だ。友達の工作をわざとではないが、こわしたコウくんが、ごめんねと謝って、友達と仲直りしたという内容だ。正直、保育園の子向けだな、と思った。祖母は何も聞かなかった。

「幸、机の上にあったラキューの車、どこへやったんや。」

ぼくが一番下の弟は、本と同じで「幸<sup>コウ</sup>」と言う。

「ごめん、ごめん、ちょっとこわれただけやで、今くっつけ中。」

簡単にごめんと二度言われても、ぼくの心の黒いイライラは止まらなかった。幸は、あやまったけれど許してくれない、と母につげ口をしている。ぼくが悪者か？

ぼくたちは、よくケンカをする。仲直りの言葉は、「ごめんなさい」だ。ごめんなさいの言葉で許せるときもあるが、今回みたいに許せないときもある。何が違うのだろうか。

「コウくんときいろいはね」の本に出てくるコウくんは、謝らなくてはいけないとわかっているのに、なかなか謝れなかった。ごめんなさいという言葉、相手に伝わるように伝えることに勇気がいるのだ。伝えることは、心がこもってないと相手に伝わらないのだ。

「ごめんなさい」とは、自分が相手にしてしまったイライラや悲しい気持ち等の、黒いモヤモヤしたものを少なくするために使う言葉だ。その為には、「悪かったな」と言う気持ちが入っていないといけない。

「心からのごめんなさい」が必要なのだ。

目には見えないけれど、心からのごめんなさいと、言葉だけのごめんなさいは聞きわけることができる。ぼくが、幸のごめんなさいを許せなかったのは、言葉だけのごめんなさいだったからだ。

真剣に謝っているときは、目が違う。言葉の温かさも違う。心に伝わるものがある。

腹が立ったままだったの、なんとなく「ごめんなさい」って、なんでそういうようになったのかを調べてみたら、許してくれた相手を尊敬する言葉だと書いてあった。

幸だけを責めることはできない。ぼくも相手に対して、心のこもっていないごめんなさいの言葉をつかっていることがあるし、許せなかったぼくは、やっぱり「ごめんなさい」に値しないんだ。

このことを気づかせてくれたこの本って、すごい本だったのかもしれない。祖母は結局、この本について、何も言わなかった。ただ、ごめんなさいって自分から言えるかなと、ぼくたちに聞く。

弟たちは、言えると簡単に言うが、ぼくのこれからの「ごめんなさい」は本当の「ごめんなさい」だ。コウくんから教えてもらったし、幸にも兄として教えてあげようと決めた。